

## <資料紹介>英国におけるオーラルヒストリー(2) : 収集・整理・公開の方法

著者	梅崎 修
出版者	法政大学キャリアデザイン学会
雑誌名	生涯学習とキャリアデザイン
巻	12
号	2
ページ	121-130
発行年	2015-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10023">http://hdl.handle.net/10114/10023</a>

---

〈資料紹介〉

# 英国におけるオーラルヒストリー(2)

## —収集・整理・公開の方法—

法政大学キャリアデザイン学部教授 梅崎 修

---

### 1 調査の目的

本稿は、英国におけるオーラルヒストリー・アーカイブについて紹介する。既に梅崎 (2014) 「英国におけるオーラルヒストリー (1) —フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』Vol.12 No.1 (2014年) では、英国におけるフリーランスのオーラルヒストリアンたちの活動を紹介した。これに続く本稿では、英国におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化について報告したい。

英国は米国と並んでオーラルヒストリーの先進地域であるので、数回の調査報告だけで英国におけるオーラルヒストリーの研究や活動をすべて紹介することは不可能であろう。研究の紹介に関しては、トンプソンの主著『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』(Thompson, 2000) が翻訳され、日本の研究者にもその全貌が明らかになってきたが、大学や博物館などのオーラルヒストリーの収集・整理・展示については十分な情報が伝わっていない。

ここ 10 年の間、日本においてもオーラルヒストリーという研究手法は広がってきている。しかし、未だに個人レベルやチーム・レベルの取り組みに止まっているとも言える。特にオーラルヒストリーのアーカイブ化に関しては、その重要性が指摘されつつも実行するのは難しく、遅れている<sup>1)</sup>。将来、日本においてオーラルヒストリーの収集・整理・展示が進展しなければ、オーラルヒ

ストリーという調査が世代を超えて引き継がれることは難しい。すなわち、個々の研究者が調査し、その調査結果をその人自身が利用するという“短いスパン”でオーラルヒストリーが行われてしまう。言い換えれば、オーラルヒストリーのアーカイブがあるからこそ、調査は、調査者の人生という短いスパンを越えられる。つまり、自分の調査が保存されることを期待して口述資料を寄贈し、その結果、世代を超えてオーラルヒストリーの利用者が生まれる。

私は、2013年4月より2014年3月まで大学の在外研究制度を利用して英国ロンドンに滞在した。1年間の滞在中、大学や博物館などを訪問し、研究者、アーキビスト、およびフリーランスのオーラルヒストリアンとの交流の機会を持った。日本では、英国におけるオーラルヒストリーのアーカイブ化について紹介されることが少ないので、その実情を報告したいと思う。

なお、英国のオーラルヒストリーを理解するのは、先ほど紹介したトンプソンの著作と、彼の学生であった酒井順子氏が日本人向けに執筆したテキスト『市民のオーラル・ヒストリー』が参考になる。ただし、英国のオーラルヒストリーの広がりやを踏まえれば、それだけでは十分な情報ではないとも言える。海外のオーラルヒストリーの紹介に関しては、私が、研究仲間の田口和雄と行った、米国におけるオーラルヒストリー・センターの紹介がある(梅崎・田口 (2012, 2013, 2014)、田口・梅崎 (2012, 2013a, 2013b, 2014))。ただし、こ

れら一連の調査は、米国が対象であった。本稿が英国の取り組みを紹介する意義はあろう。

なお、筆者がロンドンに滞在していた関係でロンドンおよびロンドン近郊の活動を中心に紹介することをあらかじめ記しておく。

## 2. 拠点としての博物館と図書館

英国では、博物館や図書館がオーラルヒストリーを保存している。さらに、それらを保存しているだけでなく、独自のオーラルヒストリーを実施しながら、工夫を凝らした展示を行っているところもある。オーラルヒストリーの展示は、歴史研究のためだけでなく。それらは、一般利用者のための歴史教育の場又は過去を想起させる場として機能している。このような博物館や図書館における口述資料の取り扱いについて具体的な情報を紹介することは、日本においてオーラルヒストリーを“生きた資料”とする活動に取り組む人たちに役立つと思う。本稿では、私が訪問した3つのアーカイブを紹介する。

### (1) ロンドン博物館 (Museum of London)

はじめに紹介するのは、ロンドン中心部にあるロンドン博物館である。私は、2013年6月18日に訪問し、オーラルヒストリー・コレクションの調査、管理、および展示を担当しているキュレーターの Sarah Gudgin さんにインタビューを行った。彼女は、フリーランスのオーラルヒストリアンであり、数々のオーラルヒストリー調査に参加し、オーラルヒストリーの教育やワークショップなどを手掛けてきた<sup>2)</sup>。ロンドン博物館のオーラルヒストリー・プロジェクトを語る最も適した人物と言えよう。

ロンドン博物館が保存する全オーラルヒストリー・コレクションのインタビュー時間は約5000時間である。歴史研究者によって行われたオーラルヒストリーもあるが、テレビのドキュメンタリー番組で集められた映像資料も寄贈されている。

ロンドン博物館がオーラルヒストリーの収集を開始したのは、1985年に始まった「港と河川のオーラルヒストリー・プロジェクト」からである。このオーラルヒストリー・プロジェクトは、ロンドンの東部の労働者生活や文化を対象としている。ロンドン東部は、今では再開発が進んでいるが、テムズ川沿いには船渠があり、かつては港と河川で働く労働者が多かった。これらの口述資料は、Working Life というコレクションと名付けられて約200回分の口述資料が保存されている。このうち500時間分の口述資料は映像である。dockers, engineers, stevedores, lightermen, watermen, machine operators, river pilots, typists, potters, crane drivers, customs officers, policemen, pie & mash shop manufacturing という多様な職業人たちがインタビューされており、職場や労使関係はもとより、家族やコミュニティのことまで質問されている。ロンドンの working class の労働者文化を分析できる貴重な口述資料と言えよう。

次に、代表的なコレクションとしては、London history workshop collection が挙げられる。このコレクションは、市民の歴史教育を目的として1983年に設立され、その後1990年まで続けられた The London History Workshop がそのはじまりである。このワークショップは、歴史学者の Raphael Samuel 氏と Jerry White 氏が中心になって実施された。プロジェクト終了後、この資料が1992年にロンドン博物館に保存されることになったのである。

この他にも様々なオーラルヒストリーが保存されている。例えば、ロンドンへやってきた移民や多文化コミュニティに焦点を当てたロンドン市民のオーラルヒストリー、1990年代に行われたロンドン空襲のオーラルヒストリー、The Rothschild Buildings の住民たちのオーラルヒストリー、盗みや売春など多かったスラム街の Campbell Road 地域の住人たちのオーラルヒストリー、The Making of Modern London というテレビ番組によって収集された映像資料、ロン

ドンに住むアジア人のコミュニティ、トルコ人、キプロス人、ユダヤ人やロシア人などにインタビューした London's Voices プロジェクト (1998-1999)、亡命者のオーラルヒストリーなどが挙げられる。

これらのコレクションを見れば、ロンドン博物館のオーラルヒストリー・コレクションは都市部におけるマイノリティ・グループのオーラルヒストリーが多いことが分かる。外国人や移民が多い国際都市ロンドンにおける多文化を象徴していると言えよう。人種差別や階級格差などの社会問題を考えると、オーラルヒストリーという活動が多様性に対する感受性を高めるという社会的機能を果たしていると考えられる。

なお、Sarah Gudgin さんにお聞きしたところ、これらのオーラルヒストリー・コレクションの収集と保存は、少数の専任スタッフとボランティアによって運営されていた。日本の現状を考えれば、このような組織があること自体が恵まれているが、文書資料などの資料管理と比べると充実した体制とは言えない。1992年に初めて常勤のキュレーターが雇われたが、それまではオーラルヒストリー・コレクションの専任ポストはなかった。その後2名の常勤になるのだが、今はパートタイムのポストになってしまっている。Sarah Gudgin さんは、Oral History Society (OHS 英国オーラルヒストリー学会) のロンドン地域のリーダー的存在であり、フリーランスのオーラルヒストリアンとのネットワークも構築しているが、実際のところロンドン博物館からの支援は減っている。このような組織体制の限界を支えているのが、フリーランスのオーラルヒストリアンによるボランティアである。オーラルヒストリーの実施や展示会でも協力してくれている。

彼女ら彼女らはどのようにオーラルヒストリーを学んでいるのかと質問したところ、Oral History Society が一般向けに行っているコースが役立っていると答えてくれた。また彼女は、フリーランスのオーラルヒストリアンはそれぞれの得意な分野や手法を持っていると言う。例えば、Sarah

Gudgin さんは臨床心理の勉強をしたことがあり、それゆえカウンセリングのメソッドがオーラルヒストリーにも役立つと語ってくれた。

さて、これらのオーラルヒストリー・コレクションは、ただ単に保存されているわけではなく、博物館の利用者に向けて展示されている。まず、図1展示例①に示したのは、映像資料を壁に映した展示の例である。映像を見ながら語りを聴くことができる。実は、写真に写っている Shamim Nurbhai さんは、Sarah Gudgin さんの母親である。また、映像右部分には手話による映像化が行われており、聾啞者も映像と手話でオーラルヒストリーを“感じる”ことができる工夫がなされている。

このような五感を刺激する展示は、他の展示でも行われている。図2展示例②は、Working Life の調査プロジェクトの際に収集された仕事道具などであるが、これらの物とオーラルヒストリーの語りを同時に感じることで、過去の想起が行いやすいと言える。この他、ロンドン空襲に関しては、あえて暗い展示スペースを作り、空襲をイメージさせる映像を作成し、その映像中でオーラルヒストリーを聴くという展示になっている。一方、映像がなくて音声だけがある場合は、図3展示例③のようなボックス席に座ってじっくりと音声を聴く展示になっている。

これらの展示方法は、「歴史を覚える」のではなく、「歴史を感じる」ための試みであろう。日本でも同様の問題意識を持ってオーラルヒストリーに取り組む人たちには役立つ情報だと私は思う。

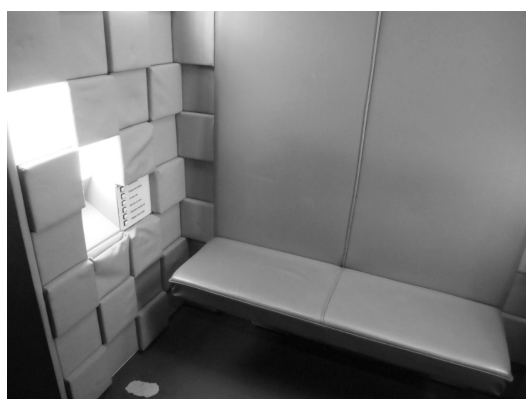
## (2) 大英図書館 (British Library)

英国で最も大規模なオーラルヒストリーのアーカイブは、大英図書館にある。英国において最大の図書館が、オーラルヒストリーのアーカイブ化に取り組んでいることを考えても、英国におけるオーラルヒストリーの分厚い蓄積を推察することができる。私は、2013年3月5日に大英図書館を訪問し、アーカイブ職員の Elspeth Millar さん

図1 展示例①



図3 展示例③



にインタビューを行った。以下の記述は、インタビュー・メモと戴いた資料、および Web サイトを基にしている。

大英図書館のオーラルヒストリー・アーカイブは、独自調査、共同調査、寄贈資料などが The British Library Sound Archive's oral history collections として整理されている。このコレクション収集が幅広い分野で行われていることは、以下の分類項目を見てもよくわかる。

- ・ Major national oral history projects and surveys
- ・ Architecture and landscape design
- ・ Arts and crafts
- ・ Business and finance
- ・ Education
- ・ Ethnicity and post-colonialism

図2 展示例②



- ・ Food and drink
- ・ Industry, agriculture and employment
- ・ Jewish experience in Britain and Holocaust testimonies
- ・ Law and the legal system
- ・ Medicine and health professionals
- ・ Museums, libraries and heritage organisations
- ・ Performing arts and music
- ・ Personal health, mental health and disability
- ・ Politics and government
- ・ Religion and belief
- ・ Science and technology
- ・ Sexuality, reproductive health and prostitution
- ・ Social policy and social movements
- ・ Sport



- ・ War, conflict and trauma
- ・ Women's history
- ・ Writing and publishing

主要なテーマとしては、イギリス植民地、宗教、メディアの歴史、産業、政治、芸術、女性史、ユダヤ史などがある。この分類項目は、大英図書館の Web サイト上で公開されており、その一部は映像としてインターネット上で見る事が可能で

ある。図4を見ると、音声の資料の中にオーラルヒストリーが位置づけられ、外部から見やすい、聴きやすい、読みやすい形でまとめられていることがわかる。なお、大英図書館に保存されるオーラルヒストリーの多くは、テープ起こしに加えて family background, childhood, education, work, leisure and later life などの個人属性を記述している。

図4 Oral History の Web サイト



資料出所) British Library ホームページ

さらに、オーラルヒストリー・コレクションと並行して The National Life Stories Collection というプロジェクトがある。このプロジェクトは、1987年に開始され、現在まで続いている。その使命は、社会の一側面としての個人の経験を記録し、公に利用できるようにその記録を保存することである。

約 35000回 (2012年時点) があり、そのうち約 2500回がこのプロジェクトによって実施された人生史の深いインタビューである。これら

は、The British Library Sound Archive's oral history collections によっても支えられている。

このプロジェクトの設立者である Paul Thompson は、設立当初、関係者と相談して幅広い分野においてオーラルヒストリーを行うことを目指した。特にその当時、イギリスのオーラルヒストリー調査はエリート・オーラルヒストリーが少なかったが、それらのオーラルヒストリーにも積極的に取り組んだ。また、英国全土のオーラルヒストリアンたちのネットワーク化にも着手し

た。このプロジェクトも大英図書館主導で行われているだけでなく、外部機関が主導で大英図書館は資料の保存を担当するという連携も多い。様々な取り組みの結果、プロジェクト開始時点では、オーラルヒストリーの認知度は低かったが、徐々にイギリス全土で評価されるようになった。

さらに、大英図書館の活動は、オーラルヒストリーの保存・整理・展示だけに留まらない。第一に、大英図書館はオーラルヒストリーの教育の場として機能している。Oral History Society が主催する短期訓練（全1日）は、大英図書館内で毎月1〜2回という頻度で行われている。このプログラムは、主にフリーランスのオーラルヒストリアンや学生向けの入門訓練である。

第二に、大英図書館では、The British Library Sound Archive's oral history collections を使って、いくつかの魅力的な Web ページを作り、研究や教育に役立てている。さらに外部の組織と連携しながら、オーラルヒストリーを使ったイベントを行っている。例えば、英国フェミニズム運動のオーラルヒストリーのコレクションは、Sisterhood and After: An oral history of the women's liberation movement としてまとまっており、Web サイト上、テーマ別に映像を見ることができる。このプロジェクトは、1968年から1990年まで英国で活躍した約60名のフェミニ

スト活動家にインタビューしたものであり、サセックス大学 (Sussex University) や Women's Library との連携で進められた。

2014年3月3日には、大英図書館においてこのコレクションを使った Sisterhood : Greenham in Common というイベントが行われた（図5参照）。Greenham in Common とは、1981年にイギリスで行った女性による反戦社会運動である。彼女たちは、キャンプをしながら運動を続けた。

私は、オーラルヒストリーのコレクションがどのように活かされているかを知るために、このイベントに参加した。会場は、女性研究者と女性活動家によって埋め尽くされ、活気がみなぎっていた。壇上には、フェミニストの研究者や運動の当事者が、過去の映像やオーラルヒストリー映像を見ながら当時の経験を思い起こしつつ、お互いに語りの解釈について発言していた。最後には、現代における運動の意味について会場からの質問を受けて議論された。私の語学力と知識不足から十分にその議論の内容を理解するのは難しかったが、その解釈は歴史を懐かしむものではなく、現在のフェミニズム運動に向けた対話であった。私が参加したオーラルヒストリーのイベントの中でも最も活気があったイベントである。Web サイトを見ると、その後もテーマを変えながらフェミニズム運動のイベントは続けられている。なお、このようなイベントは、Oral History Society のホームページでも紹介されるが、その他にも History of feminism Network やサセックス大学の Centre for Life History and Life Writing Research のネットワークなどでも紹介されており、英国内における人的ネットワークの充実度を感じることができる。

なお、大英図書館における数々の活動は、内部の優秀なスタッフだけでなく、数々の外部支援者によって支えられている。例えば、The National Life Stories Collection の運営に関しては、外部からの参加者も含めてディレクター3名、プロジェクト別のディレクター4名、会計1名、学術コンサルタント1名、カタログ作成者1

図5 Greenham in Common の写真



資料出所) Sisterhood and After の Web サイト

名、アーカイブ支援 2 名、事務支援 1 名、Voice of Science Web 共同作成者 1 名、プロジェクト別インタビュアー 9 名、カメラマン 1 名、テープ起こし者 3 名、フリーランスのオーラルヒストリー・インタビュアー 11 名、ボランティア 5 名、評議員 14 名、アドバイザー 15 名であった。フリーランス、評議員、アドバイザーの多さを考えると、大英図書館だけの力というよりも大英図書館を中心としたオーラルヒストリアンたちのネットワークの力と言えよう。

### (3) ブライトン博物館 & 美術館 (Brighton Museum & Art Gallery)

第三に紹介するのは、ブライトン博物館 & 美術館である。実は、この博物館には、特に調査の目的で訪問したわけではなく、ブライトン観光に行った際に偶然出会った。ブライトンは、英国の避暑地として有名な土地で、ブライトン博物館 & 美術館も観光客が多かった。この中で私が見つけて関心を持ったのは、図 7 に示した Listening Post であった。

Listening Post は、展示物と一緒に置いてあり、このポストの受話器からオーラルヒストリーを聴くことができる。例えば、ブライトンの漁業を説明する展示では、漁業の道具と一緒に漁業労働者の語りがある。これを(過去からの)ポストと呼んでいる。このような展示の工夫は、ロンドン博物館の展示とも共通する事例と言えよう。音声(映像であっても)は、聴くだけならばその助長性が多くの人にとって退屈である。歴史研究者以外は時間をかけてオーラルヒストリーを聴こうとはしない。それゆえ、耳を傾けさせる工夫が必要なのである。

残念ながら担当者に詳しい話を聴くことはできなかったが、いつか再訪し、この展示について詳しく質問してみたいと思う。

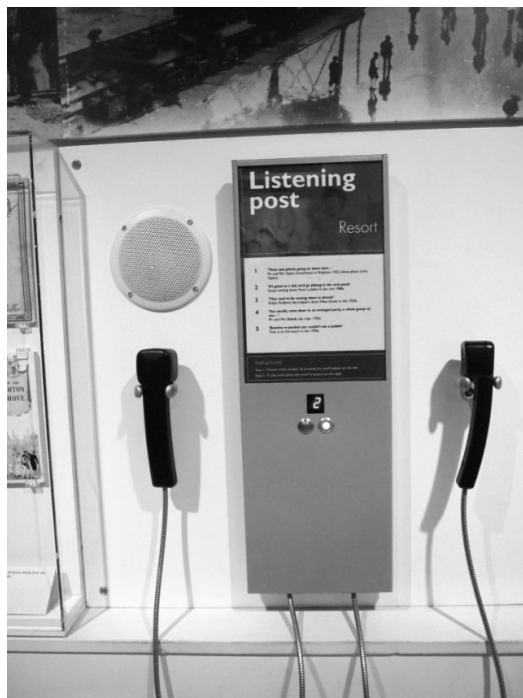
## 3 生きたアーカイブへ向けて

本稿では、英国におけるオーラルヒストリー・

図 6 ブライトン博物館 & 美術館の内部



図 7 Listening Post



アーカイブについて紹介してきた。本稿の事例は少ないが、オーラルヒストリーのアーカイブにこれから取り組もうとしている人達には、何かしら役立つ情報があると思う。また、“役立つ”だけではないと思いたい。

日本には数多くの博物館や図書館があり、そこで歴史と向き合う人達がいる。彼ら彼女らが、オーラルヒストリーの収集・保存・展示に興味を持っ



てくれたらと想像してみる。博物館・図書館がオーラルヒストリーに対して何をしてくれるのかではなく、オーラルヒストリーが博物館・図書館に何ができるのかを考えればよい。

もちろん、大英図書館のような大規模なプロジェクトは難しいだろう。しかし、英国のアーカイブが多くの博物館や図書館のネットワーク、そしてオーラルヒストリアンたちの人的ネットワークによって支えられていることを考えれば、日本には隠された大きな可能性がある。既に小さなアーカイブづくりや地域コミュニティでのオーラルヒストリーの展示は始まっている<sup>3)</sup>。これから始まるオーラルヒストリー・プロジェクトも、たぶんある。だからこそ、各地の博物館や図書館が連結点となって点が線になるように繋がることは、オーラルヒストリーにとって希望である。そのためにこの小論が役立つならば、これほどうれしいことはない。全国のオーラルヒストリアンたちよ、繋がろうではないか。

#### 注

- 1) 日本での取り組みについては、梅崎 (2014) を参照。
- 2) 彼女とは、その後、梅崎 (2014) でも紹介した Continuing Professional Development Freelancer's Workshop でも再会した。
- 3) 例えば、多摩ニュータウンでのオーラルヒストリーの試み (細野・中庭 (2010)) や神楽坂でのオーラルヒストリー教育実践 (梅崎・佐藤・笥 (2015)) がある。

#### 参考文献

- 梅崎修・田口和雄 (2012) 「Regional Oral History Office (ROHO) のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』9, pp.75-85
- ・——— (2013) 「コロンビア大学・CCOH (Columbia Center of Oral History) におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについ

て」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10, pp.319-338

- ・——— (2014) 「MATRIX (The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University) におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』11, pp.279-296

- (2014) 「英国におけるオーラルヒストリー (1) —フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』Vol.12 No.1 pp.123-130

- ・佐藤憲・笥隆太 (2015) 「オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性—大学生によるタウン誌作成の実践を通じて」『地域イノベーション』第7号 (掲載予定)

- (2014) 「労働史オーラルヒストリー・アーカイブの試み—像化の取り組みと資料の利用可能性を中心に—」 (未刊行)

- 酒井順子 (2008) 『市民のオーラル・ヒストリー—歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部

- 田口和雄・梅崎修 (2012) 「アメリカにおけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の現状について—UCLA Center for Oral History Research (COHR) のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47(1) pp.99-119

- ・——— (2013a) 「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47(4) pp.97-118

- ・——— (2013b) 「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museum におけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂学園創立 110 周年記念論文集 I』 pp.311-323

- ・——— (2014) 「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairs におけるオーラル

ヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状  
について」『高千穂論叢、高千穂学園創立 110  
周年記念論文集Ⅱ』48(3・4), pp.139-162  
細野助博・中庭光彦編著 (2010)『オーラル・ヒス  
トリー 多摩ニュータウン』中央大学出版会

Paul Thompson (2000) *The Voice of the Past: Oral History* 3 rd. ed. Oxford (酒井順子訳  
(2002)『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリー  
の世界』青木書店)。

---

## **Oral history in the United Kingdom (2)**

### **Ways of collecting, safekeeping, and exhibiting oral history**

UMEZAKI Osamu

---

This report introduces an oral history archive in the United Kingdom (UK), a country that is advanced in the study of oral history and in related research. I visited the Museum of London, the Brighton Museum & Art Gallery, and the British Library in the UK that have rich archives. The staff has knowledge on how to manage and exhibit oral documents.

I interviewed some staff members of these archives and attended some exhibitions on oral history. This paper presents my report on my investigations. It is likely that this report will offer valuable information on ways of collecting, safekeeping, and exhibiting oral history, which will be useful for Japanese oral historians.